

イディオム「腑に落ちない」の構造をめぐって* ——語彙部門と統語部門の狭間——

森 川 正 博

0. はじめに

ある述語が語彙部門で形成されたものか、同述語が統語部門で編入などにより形成されたものかが、分かりにくい場合が日本語にある。典型的な例としては、影山(1993)が「書き込む」と「呼び始める」の複合動詞を取り上げている。この表現の構造の違いは、例えば統語操作の受身化の適用の可否(「*書かれ込む」vs.「呼ばれ始める」)で明らかにされている。

類似したものに、次の例文で示すイディオム「腑に落ちない」があるが、その構造は明らかではない。¹

(1) 私には彼の説明が腑に落ちない。

否定辞「ない」は形容詞と同じ活用をする。その「ない」を含む「腑に落ちない」は、全体で形容詞として働く語彙項目なのか、述語「腑に落ちる」と「ない」が統語で併合したものなのか、あるいはその両方が関わるのかに関しては議論の余地がある。

岸本(2010)は、主として否定の作用域に関する議論から、当該のイディオムは統語で形成されるという立場をとっている。その際、節内における一般動詞と形容詞を判別するテストを用いて、否定辞「ない」には、一般的な述語と併合する機能述語(機能的特性 [-lexical] を持つ)「ない」と、述語と併合してイディオムを形成する‘語彙的述語’(語彙的特性 [+lexical] を持つ)「ない」があると主張している。それに対し本稿では、「腑に落ちない」は、一語彙項目とも、また「腑に落ちる」と「ない」が統語で併合

された連鎖とも分析できることから、基本的に二重の構造を持つことを主張する。

「ない」を含んだ構造を特定しがたいのはイディオムだけに限らず、「動詞+「ない」」の連鎖にも見られる。その連鎖は、特に、認識を表す動詞／述語（“認識動詞／認識述語”）を含むと、二重構造を持つ場合が多い。

そこで、本稿の前半では、認識動詞あるいはイディオムとなった認識述語に「ない」が後接した連鎖には、少なくとも2つのパターンがあることを指摘する。そして後半部分では、岸本の主張を概観し、語彙的述語「ない」と否定の作用域に関する統語的振る舞いについて、その問題を指摘する。また、本稿で分類する2つの連鎖パターンに照らして、語彙と統語の両面から分析する可能性を追究していきたい。

1. 認識動詞+「ない」

本節では、認識動詞の振る舞いを精査する。その際、岸本（2010）で用いられた、動詞や形容詞の統語上の特徴を示す3つのテストに従う。それによって、認識動詞は2種類に分類できることを示す。

まず、動詞と形容詞とを分別するテスト①、②を見てみよう。

テスト①：「ほしい（と思う）」の補文

「ほしい（と思う）」によって導かれる補文には、形容詞節は許されないが動詞節は許される（例文（2 a-b）参照）。

(2) a. 私は [あの人が来て] ほしいと思う。²

b. *私は [あの人がかわいくて] ほしいと思う。（岸本 2010: 33）

テスト②：否定形「ないでいる」

否定される述語が動詞の場合にのみ、「ないでいる」という否定形を作ることができる（例文（3 a-b）参照、cf. 増岡・田窪（1989））。ただし、「ないでいる」形の主語の意味役割は、（3c）で示すように、動作主以外は許されない。

(3) a. 太郎はりんごを食べないでいる。

- b. *太郎が おもしろくない ている / おもしろくなく ている。
- c. *風が吹かない ている。

通常、述語が(2a)(3a)で示した行為を表す動詞(「来る／食べる」)や、(4a-b)で示す状態(変化)を表す動詞(「開ける／開く／始める」)は、テスト①、②に違反なく許される。また(5a-c)で示すように、認識動詞も許される。

- (4) a. 私は [あの人がドアを開けて / ドアが開いて] ほしい と思 っている。
- b. 太郎はまだスピーチを 始めない ている。
- (5) a. 私は [彼の意向を諒として] ほしい。
- b. 太郎は私の気持ちを 察しない ている。
- c. 私は [太郎がこの決定に早く割り切れて] ほしい と思 っている。

ところが、テスト①において補文内に否定辞「ない」を含むと、行為・状態(変化)を表す動詞は許されるが、認識動詞は許されるものと許されないものが出てくる。

- (6) a. 私は [あの人が本を読まないで / ドアを開けないで] ほしい と思 っている。
- b. 私は [ドアが開かないで] ほしい と思 っている。
- (7) a. 私は 花子がその意向を 諒としない でほしい と思 った。
- b. そんなことまで 悟らない でほしい。
- c. 私の気持ちをそんなに早く 察しない でほしい。
- (8) a. * 私は 花子がその提案に 頷けない でほしい と思 った。
- b. * そんなに簡単に 割り切れない でほしい。
- c. * 他人の言うことをそう簡単に 聞き分けない でほしい。

(7)で示したように、「諒とする」「悟る」「察する」などの認識動詞は、「ほしい」の補文内で否定辞「ない」と共起できる。この種の動詞を“認識動詞A類”と呼ぶことにする。一方(8)で示したように、「頷ける」「割り切れる」「聞き分ける」などの動詞は、「ほしい」の補文内で否定辞「な

い」と共起できない。この種の動詞を“認識動詞B類”と呼ぶことにする。ちなみに、後者の動詞は、「領く+れる(可能)」「割る+切れる」「聞く+分ける」のように、語彙部門で結合したものである。それは、その動詞の前半部分に統語操作の受身化が適用できないことから明らかである(例:「*割られ切れる」)。

最後に、形容詞に関するテスト③を見てみよう。

テスト③:「思う」の小節

「思う」によって導かれる小節には、(9)で示すように、形容詞節しか現れない。

(9) a. *ジョンは[この本を売れなく]思った。

b. ジョンは[この本をおもしろく]思った。 (岸本2010: 35)

もちろん、(9b)の形容詞に否定辞「ない」が付くこともできる。

(9) c. ジョンは[この本をおもしろくなく]思った。

(9a)と(9b-c)の対比からも分かるように、「思う」の取る小節が形容詞節であれば、否定辞「ない」の有無に左右されず文は文法的となり、またその小節が動詞句であれば文は非文法的となる。

ここで、この「思う」が取る小節内に、(7)(8)で用いた認識動詞に「ない」を付けた述語を入れると、その文法性の判断に違いが生じる。

(10) a. *花子はその意向を諒としなく思っている。

b. *花子がそんなことまで悟らなく思っている。

c. *太郎は私の気持ちを察しなく思っている。

(11) a. 私はその提案に今も領けなく思っている。

b. 私は太郎の話を割り切れなく思った。

c. 私はその子供を聞き分けなく思った。

「思う」の小節内には、(10)で示したように、「認識動詞A類+「ない」」は許されない。一方(11)で示したように、「認識動詞B類+「ない」」はそこに許される。

以上をまとめると、表(13)のようになる。なお、認識動詞A類に分

類される動詞の数は多いが、B類の動詞はそう多くはない。³

(12) 認識動詞

- a. A類：諒とする、悟る、察する、分かる、受け取る、取る、納得する、知る、読む、読める、掴む、心得る、飲み込む、消化する、把握する、理解する、会得する、承知する、了解する、…
- b. B類：割り切れる、頷ける、聞き分ける、解せる、…⁴

(13)

| 認識動詞 「ない」を含む述語 | A類 | B類 |
|----------------------|----|----|
| 「V+ないでほしい」 (テスト①) | 0 | X |
| 「V+ないでいる」 (テスト②) | 0 | 0 |
| 「V+なく思う」 (テスト③) | X | 0 |

この表から次の3点のことが言える。まず第1に、「ない」が後接するA類の認識動詞の述語は、テスト①②から動詞性を保持しており、またテスト③から形容詞節を構成するものではないことが明らかである。つまり、A類の認識動詞に「ない」が後接していても動詞として典型的に振る舞うものである。第2に、「ない」が後接するB類の認識動詞の述語は、テスト②から形容詞ではなく動詞の特徴を持つと言える。しかし、テスト①から、なぜ「V+ないでほしい」の形を取れないのかという疑問が生じる。そこで、B類の認識動詞の用法に「『ほしい』の補文では肯定形のみ生起できる」という意味上の制約が存在すると仮定することで、この疑問は解消する。その根拠は、(8')のように述語「ほしい」に否定辞を付けることによって補文内の肯定形が許され、(8)と同じ解釈が得られることにある。

(8') a. 私は花子とその提案に頷けてほしくないと思う。

- b. そんなに簡単に割り切れてほしくない。
- c. 他人の言うことをそう簡単に聞き分けてほしくない。

表(13)に関して言える第3番目の点は、「ない」が後接するB類の認識動詞の述語はテスト②から動詞性を保持するが、テスト③から動詞性を保持していないという矛盾である。

B類の認識動詞の動詞性に関する矛盾を解明するために、一般的に動詞は統語部門で併合されるが、B類の認識動詞に限っては語彙部門でも否定辞「ない」と結合できて形容詞(“派生形容詞”)が派生すると、本稿では提案する。言い換えると、「B類の認識動詞+「ない」」が統語で併合した結果の連鎖と、語彙項目としての連鎖とが同一表現のため、一見矛盾するテスト結果となる。これが、語彙部門と統語部門の狭間の問題である。なお、認識動詞に限らず一般的な動詞に「ない」が付くという語彙部門での現象は、特異なことではない。Kishimoto(2008:399)は、「やりきれない」「くだらない」「つまらない」「動じない」「揺るがない」などをリストにしている。

以上、「ない」が後接する認識動詞の述語の特徴を考察した結果、動詞性を持つ認識動詞A類と動詞性と形容詞性を併せ持つという、一見矛盾するB類とに分けた。そして、「認識動詞B類+「ない」」の述語は語彙と統語、それぞれで異なる構造を持つと提案することで、その見かけ上の矛盾を説明した。この提案を支持する議論は、第2節と第4節で提出したい。

2. イディオムとなった「認識述語+「ない」

前節で考察した「認識動詞+「ない」」に見られる現象は、興味深いことに、認識を表すイディオムにも見られる。まず、認識動詞A類と動詞性において同じ振る舞いをするイディオム「分別が付く」「合点がいく」を見てみよう。

- (14) a. 私はその子がまだものの分別が付かないでほしいと思う。
- b. その人はいまだものの分別が付かないでいた。

c. *私はあの人をものの分別が付かなく思った。

(15) a. 私は太郎がそのお粗末な説明には合点がいかないでほしいと思う。

b. 太郎はまだその説明に合点がいかないでいる。

c. *太郎はその説明に合点がいかなく思った。

(14a-c) (15a-c)で示したように、「分別が付かない」「合点がいかない」は動詞性を保持することが分かる。よって、イディオム「分別が付く」「合点がいく」を“認識述語A類”と呼ぶことにする。なお、(14a) (15a)は、補文内を肯定形にして主節述語に「ない」を併合した形で書き換えることも勿論できる。

(14') a. 私はその子がまだものの分別が付いて {ほしくないと思う／ほしいと思わない}。

(15') a. 私は太郎がそのお粗末な説明には合点がいて {ほしくないと思う／ほしいと思わない}。

次に、B類の認識動詞と同じ振る舞いをするイディオムに目を転じてみよう。

(16) a. *私は [メアリーに彼の言うことが腑に落ちない] ほしいと思う。

b. 彼は (いまだに) その発言が腑に落ちないでいる。

c. (?) メアリーは [彼の行動を腑に落ちなく] 思った。

(岸本2010: 35-36)

(16a) に関して、否定辞「ない」を補文内ではなく述語「ほしい」に付けると、(17)で示すように、文は文法的となることから、認識動詞B類と同じ意味制約が作用すると考えられる。

(17) 私は [メアリーに彼の言うことが腑に落ちて] ほしくないと思う。
例文(16a-c)を表(13)と照合すると、「腑に落ちる」はB類の認識動詞と同じパターンを示すことから、“認識述語B類”と呼ぶことにする。具体的にはイディオム「腑に落ちる」は、(16a)で示したように、「ほし

い」補文内で否定辞「ない」を伴うことができないが、(17)で示したように補文に肯定形が許されるという事実から、その動詞性を保持することがわかる。また「腑に落ちない」は、(16b)で示したように、「ないでいる」形が作れることから、全体で動詞性を保持することが分かる。そしてそれが統語で「ない」と併合され、「腑に落ちない」となる。ところが(16c)で示したように、「腑に落ちない」は、形容詞としても機能するという事実から派生形容詞であることが分かる。これはまさに、前節で提案したことである。このように(16a)の非文法性は、「ほしい」が取る補文内では認識述語「腑に落ちる」が否定形を取れないこと、あるいは「認識動詞+「ない」」が派生形容詞であることによる。

なお、現代日本語では一般的に、「腑に落ちる」には否定辞「ない」が後接する。⁵これと同じパターンとなるのに、認識動詞B類の「煮え切る」がある。

- (18) a. *太郎の態度が煮え切った。
b. *私は[太郎の態度が煮え切らないで]ほしいと思う。
c. 彼は(いまだに)態度が煮え切らないでいる。
d. 私は[太郎の態度を煮え切らなく]思った。

しかし、(17)で見たように、あるいは(19a-b)で示すように、このパターンの動詞は「ない」と必ずしも隣接する必要はないが、両者は共起していなければならない。ただし、(19c)で示すように、この動詞と共起する「ない」は、構造上、上位にないといけない。

- (19) a. その説明は十分でなかったので、腑に落ちもしなかった。
b. その時点で、太郎の態度は煮え切ってはいなかった。
c. *その時点で、[[何も言わない]太郎]の態度は煮え切っていた。

この事実は、次節以降で取り上げる岸本の主張に対して問題を投げかけるものとなる。

3. 岸本(2010)の解決策

前節では認識動詞と並行して、認識述語もA類とB類に分類できるとし、B類については語彙と統語で派生するという二重構造を支持する議論を提出した。本節では、「腑に落ちない」に関する語彙部門と統語部門の狭間の問題に対して、岸本(2010)が提出している解決策を検討していく。

岸本によると、否定辞「ない」には、語彙要素を機能要素にする文法化というプロセスが関わる。英語のアスペクト動詞haveは、動詞の活用を持つものの本動詞としては機能していない。このhaveは本動詞に対してアスペクトの指定を行う機能要素として働いている。そのアスペクト動詞haveと同様、語彙述語としての形容詞「ない」が文法化により否定の機能要素([-lexical])として働くようになっている。機能要素haveと機能述語「ない」は、共に主要部移動を受けることができる。そのことは、次の例文によって示されている。

- (20) a. [_{TP} John would [_{NegP} not [_{VP} have arrived yet]]].
 b. [_{TP} John has [_{NegP} not [_{VP} has arrived yet]]].
-

- (21) a. *John has not a car.
 b. John does not have a car.

(20a)で示したように、法助動詞wouldのためにnotよりも右側に基底生成されるhaveが、(20b)ではnotの左側へ主要部移動する。一方、(21a-b)で示したように、本動詞haveは移動しない。

同様に、機能述語「ない」にも移動が伴うことを、岸本は次の例を用いて示している。

- (22) a. ジョンは、本を読みもしない。
 b. *ジョンは、本を読まなくもある。 (岸本2010: 30)

「ない」は主要部移動し時制辞と併合するので、副助詞「も」は、(22a)のように動詞に付けられるが、(22b)のように「ない」と時制辞との間には付けられない。

確かに機能述語「ない」は時制辞と併合するが、語彙述語「ない」との違いは何なのだろうか。そもそも文法化とは語彙要素が機能要素になることを言うので、「持つ／所有する／させる（使役）」という語彙の意味を持つ英語の本動詞 *have* が文法化によってその意味が欠落（あるいは希薄化）し、アスペクト動詞となることである（Hopper and Traugott (1993) 参照）。日本語の語彙述語「ない」は、「存在しない／所有していない」という意味であるが、機能述語「ない」は打ち消しを表すだけの機能を持つ。イデオム「腑に落ちない」の「ない」は「語彙的述語」だと岸本は主張するが、これは機能述語「ない」と意味上何ら変わりがない。この語彙述語「ない」の文法化については今後明らかにしなければならない点が残るが、このまま議論を進めていくことにする。

岸本は形容詞「つまらない」と比較して、「腑に落ちない」は構造上、[+lexical] 素性を持った「ない」が、「腑に落ちる」を主要部とする動詞句を内包する形容詞述語として機能していると提案している。

- (23) a. *ジョンは [この本がつまらないで] ほしいと思った。(テスト①)
 b. *この本は (いまだに) つまらないでいる。(テスト②)
 c. ジョンは [この本をつまらなく] 思った。(テスト③)

岸本によると、(23 a, c) はそれぞれテスト① ③において (16 a, c) と同様に振る舞うので、「つまらない」は形容詞述語となる。また、テスト②においては (23 b) の非文法性から、「つまらない」は統語上の「動詞+「ない」」の連鎖ではなく、派生形容詞だと言える。それに対して「腑に落ちない」は、(16 b) の正文性から動詞の特徴を維持している必要がある。ので、(24) の構造で示すように、動詞句と語彙的述語 ([+lexical]) 「ない」の連鎖となり、全体として NegP の形容詞節を構成することになる。

- (24) [_{TP} DP-に [_{NegP} [_{VP} DP-が 腑に落ち] ない]]
 [+lexical]

つまり、この語彙的述語「ない」によって「腑に落ちない」は、統語で派生した形容詞として機能することになる。このように、岸本は「腑に落ち

ない」を語彙部門に言及する素性を用いてはいるが、すべて統語部門で説明しようとしている。

語彙的述語「ない」を支持する議論として、岸本は、語彙的述語「ない」と否定極性表現 (NPI) を含む文の分析を提出している。(25 a) の例文とその構造 (25 b) を見てみよう。

(25) a. 彼には、その発言が {ちっとも／あまり} 腑に落ちなかった。
(岸本2010: 37)

b. [_{TP} DP-には [_{NegP} [_{VP} DP-が {ちっとも／あまり} 腑に落ち
なか] った]
[+lexical]

副詞「ちっとも／あまり」は、否定表現「ない」の存在にその生起が依存している否定極性表現である (益岡・田窪 (1996) 参照)。(例: 学生が {ちっとも／あまり} {来なかった／*来た}。) (25 b)において、イディオム「腑に落ちない」の「ない」は語彙的要素であるにもかかわらず、否定の作用域を持つ要素であると仮定されている。その語彙的特性のために、「ない」は統語において時制の位置へ主要部移動せずその位置にとどまり、NegP全体が動詞句を含む形容詞節とみなされる。

更に、「腑に落ちない」を述部を持つ文の構造 (24) において、岸本は論理上の主語 (DP-に) と目的語 (DP-が) の位置にNPIを用いた文 (26 a) と (26 b) の対比を、否定の作用域の外と内という違いに帰している。

(26) a. ?*誰一人学生に 彼の行動が腑に落ちなかった。

b. あの学生には、何一つ彼の行動が腑に落ちなかった。

(岸本2010: 37)

NPI「何一つ」を含む目的語は「ない」を主要部とするNegP内にあるので、(26 b) は容認できる。一方、NPI「誰一人」を含む主語はNegPの外側 (上位) にあるので (26 a) は容認されない。

以上、「腑に落ちない」は述語「腑に落ちる」に語彙的否定辞「ない」と統語で併合し、イディオムを形成するという岸本の主張を見てきた。また、

NPIとの共起関係において、その主張を支持する岸本の議論も見てきた。

4. 岸本への反論

本節では、岸本の分析に問題を提示するとともに、第1節、第2節で提示した考察を基に語彙部門での分析も取り込む必要性を主張していきたい。

4. 1. 「ない」の潜在的な語彙特性

まず、「腑に落ちない」の構造(24)において、いつどういう条件で語彙的述語「ない」が生起できるのかという疑問が生じる。通常は、機能述語「ない」が生起する。例えば、(27a)の例文で、その構造(27b)には機能述語「ない」がVPを補部を取る。この場合は、イディオムとはならない。

(27) a. 太郎がその本を読まない。

b. $[_{TP} \text{太郎が} [_{NegP} [_{VP} \text{その本を読ま} \text{ない}]]]$

$[-lexical]$

統語部門において「ない」を併合して特定のイディオムを形成する際に、その「ない」が[+lexical]素性を持つと仮定するのはかなり特異なことである。というのも、どのイディオムでも、「ない」が[+lexical]素性を持つとは限らないからである。例えば、A類の認識述語でイディオムとなっている「分別が付く」を用いた(14c)(再掲)を見ても分かる。

(14) c. *私はあの人をもの分別が付かなく思った。

本稿では、述語要素と統語部門で併合する、あるいは語彙部門で結合する「ない」は、機能述語「ない」の1つであるという立場をとる。その「ない」は通常、統語部門で述語と併合されるが、語の特異な性質を許す語彙部門では認識動詞B類・認識述語B類に限り結合できる。「ない」は形容詞と同じ活用をするので、B類の認識述語「腑に落ちる」に「ない」が付くと、全体で語彙要素としての派生形容詞と分類される。従って、その派生形容詞「腑に落ちない」は、動詞「思う」が取る小節内に許される(テスト

ト③、例文(16c)参照)。このように、機能述語「ない」のみを仮定すると、ある「ない」が統語部門で潜在的に語彙特性を持つという例外的措置を講じる必要はなくなる。

加えて、第2節で出した「腑に落ちる」と否定辞「ない」が隣接してなくてもよいという(19a-b)(再掲)の事実から、語彙的述語を想定することに疑問が生じる。

(19) a. その説明は十分でなかったので、腑に落ちもしなかった。

b. その時点で、太郎の態度は煮え切ってはいなかった。

岸本の言う“語彙的”「ない」が(19a-b)のように主要部移動して、時制辞と併合することになるため、機能述語「ない」と語彙的述語「ない」との区別が明確でなくなる。

4. 2. NPIと「ない」

次に、NPIと語彙的述語「ない」の否定作用域に関する議論に目を転じてみよう。岸本(2010)は、例文(25a)の構造(25b)(再掲)において、語彙的述語「ない」の否定作用域はNegPであり、TPはその作用域外であるとしている。そのため、(25a)は容認される。⁶

(25) a. 彼には、その発言が {ちっとも/あまり} 腑に落ちなかった。

(岸本2010: 37)

b. [_{TP} DP-には [_{NegP} [_{VP} DP-が {ちっとも/あまり} 腑に落ち
な] かった]

[+lexical]

問題は、NPI「ちっとも/あまり」がNegPの外側、例えば文頭に生じた(28)を非文と予測することにある。

(28) {ちっとも/あまり} 彼には、その発言が腑に落ちなかった。

実際、この文は正文であることから、「腑に落ちない」の「ない」を語彙的要素とみなすことに問題がある。

本稿では、独立文末に現れる「腑に落ちない」は、一方で語彙的に1語

の派生形容詞であり、他方で統語において併合した「動詞+「ない」」の連鎖であるという二重構造となっている。後者の統語構造において「ちつとも／あまり」は、時制位置Tへ主要部移動する機能述語「ない」の作用域に入ることになる。よって、(28)の正文性が説明される。同様のことが、「煮え切らない」を用いた(18c)でも言える。

(18') c. {ちつとも／あまり} 彼は態度が煮え切らないでいる。

また、「ちつとも／あまり」のNPIは、(16c)の「思う」の補文内に現れることができない。

(29) *?メアリーは[彼の行動を {ちつとも／あまり} 腑に落ちなく] 思った。 Cf. (16c)

ところが岸本は、「ちつとも／あまり」が語彙的述語「ない」の否定作用域内にあるので、(29)を誤って正文と予測してしまう。そもそもこの文が非文なのは、NPIが存在できるための否定作用域がない、つまりNeg「ない」が構造上ないからである。言い換えると、(29)の「腑に落ちなく」は語彙項目としての派生形容詞であり、その「なく」は否定作用域を持たない。

例文(29)の構造は、語彙部門で動詞「つまる」に「ない」が付いた派生形容詞「つまらない」を含む(30)と同じである。

(30) *私は[その仕事を {ちつとも／あまり} つまらなく]思った。「つまらない」は一重の構造を持ち、「腑に落ちない」は二重の構造を持つという違いはあるが、「つまらなく」も(29)の「腑に落ちなく」も両方とも派生形容詞である。

なお、(29)と(30)の容認性に差を感じる話者もいるかもしれないが、それは(29)の文の解釈として、統語で「ない」が時制辞に上昇する(29')の文を並行させているからだと考えられる。

(29') メアリーは[彼の行動が {ちつとも／あまり} 腑に落ちない] 思った。

4. 3. 主語位置のNPI

最後に、主語位置に想定するNPIについて、岸本の議論を考察していきたい。

例文(26a)(再掲)の主語をNPI「学生の誰一人にも」と置き換えた(31)は容認できる。

(26) a. ?*誰一人学生に 彼の行動が腑に落ちなかった。

(31) 学生の誰一人にも 彼の行動が腑に落ちなかった。

岸本の分析では、「ない」は[+lexical]素性を持った語彙的述語「ない」なので、(26)の非文法性は説明できるが、(31)の正文性は説明できない。それに対し、「腑に落ちない」が二重構造を持つという分析では、(26a)と(31)の「ない」は統語で動詞と併合する機能述語「ない」なので、時制への移動を伴い、主語もその否定作用域に入る。よって、(31)の正文性が説明されることになる。しかし、なぜ(26a)が非文法的なのかという疑問が残る。その疑問を解くうえで、不定を表す名詞句「誰一人に」に付く係助詞「も」が重要な鍵を握る。この「も」を(26a)の不定を表す主語に付けると、その文は文法的となる。

(32) 誰一人学生にも 彼の行動が腑に落ちなかった。

ただし、不定を表す表現に付く「も」は、(33)(34)で示すように必ずしも義務的な要素ではないが、(26a)が文法的と判断されるためには「も」が必要となる。

(33) a. 何*(も)知らない。

b. 何一つ(も)知らない。

(34) a. 誰*(も)来なかった。(cf. *誰が来なかった。)

b. 誰一人(も)来なかった。

c. 誰一人学生*(も/が)来なかった。

なお、係助詞「も」の有無と文の文法性の関係は、その文の述語にイデオムが生起する場合だけとは限らない。

(35) a. 昨日のTVクイズ番組では、誰一人出場者に*(も)その問題が

分からなかった。

b. 誰一人学生に[?](も) この問題が解きやすくなかった。

更に、語彙述語である形容詞「ない」の否定作用域内に不定名詞句のNPIが生じて、係助詞「も」が義務的であることが次の文から言える。

(36) [_{IP} このアニメは [_{VP} 誰一人に*(も) 興味がない]]。

まとめると、(26a)の非文法性は、「腑に落ちない」の「ない」が語彙的だからではなく、不定表現のNPIを含む主語が係助詞「も」を欠いていたためであることを明らかにした。

5. まとめ

日本語の否定辞「ない」は、語彙部門で動詞と結合して一語彙項目となることも、また統語部門で動詞と併合することもある。その「ない」が、イディオム「腑に落ちない」においては語彙的機能を持ち、統語で形成されるという見解が岸本(2010)によって出された。そこで本稿では、当該の「ない」はあくまで機能的であり、その「ない」は語彙・統語の両部門で述語要素と結合できる、つまり、二重構造を持つことを論じた。まず、「ない」と結合する認識動詞・認識述語一般に考察対象を広げ、当該の動詞・述語の動詞性／形容詞性のテストを通して、その動詞性を明らかにした。しかし、「腑に落ちない」を含むタイプの認識動詞B類・認識述語B類は、語彙部門で「ない」と結合できることも示した。その際提示した議論は、次の3点である。

- 1) 語彙の特異性に関わる要素は、語彙部門で分析することが妥当である。
- 2) 語彙的述語「ない」の否定作用域を限定した岸本(2010)の仮定は、その作用域外に否定極性表現が生起できる事実から、受け入れられない。
- 3) 岸本は、「腑に落ちない」を含む文では否定極性表現に対して観られる主語・目的語の非対称性を、語彙的述語「ない」の否定作用域の

外と内としたが、その非対称性は実は、係助詞「も」が欠如した不定名詞句によるものである。

最後に、今後の課題として、認識動詞B類・認識述語B類に共通する特徴を精査して、機能述語「ない」の働きを更に明らかにすることが求められる。

注

*本稿執筆の段階で高野泰邦氏(長崎大学)には有益なコメントをいただいた。また氏との意見交換からも学ぶことが多かった。謝意を表したい。なお、本稿を縮約、修正したものが『外池滋生教授退職記念論文集』に発表される予定である。

¹ 厳密に言うと、「腑に落ちない」は、イディオム「腑に落ちる」と否定辞「ない」が結合した述語でもある。

² 補文内の主語をマークする「が」格には、やや抵抗が感じられる。これを「に」格にすると自然な文になる。

(i) 私はあの人に来てほしいと思う。

「あの人に」は、(ii) で示すように構造上、述語「ほしい」の取る項であると考えられる。

(ii) [私は[あの人にi [PRO_i 来て] ほしい]]

本稿では、補文内の「が」格でマークされた主語に限って、テスト①を用いることにする。

³ (12)の認識動詞において、A類に「読める」があることから(例文(i)参照)、動詞に可能の「(ら)れ」が付いても必ずしもB類に分類されるとは限らない。

(i) *太郎は[花子の気持ちが読めなく]思っている。

統語のテストによってA類とB類を区別することは可能だが、語彙部門ではその区別の基準が何なのかは明らかではない。この点は、今後の課題としたい。

⁴ 非認識動詞でもB類と同じ振る舞いをする動詞も数が限られる。

(i) a. *私は彼が対戦相手を侮れないでほしい。

b. 私はいまだ彼を侮れないでいる。

c. 私は彼を侮れなく思っている。

⁵ 「腑に落ちない」の肯定形は、現代日本語では容認されないからと言って、「腑

に落ちる」という述語表現が容認さないということにはならない。それどころか、この肯定形はインターネットで検索すると明治、昭和の時代で用いられていたことがわかる。

…明治時代の徳富蘆花の小説「思出の記」の中で肯定形で使われていた場面がありました。[…四ヶ月経てば、學校の様子も大略腑に落ちて、僕も先づ關西學院生となり了(すま)したのであつた。] 明治時代にも肯定形で使われていますね。「腑に落ちる」を辞書で引いてみると【納得できる。合点がいく。多く、下に否定の語を伴って用いられる】と書かれています。…

「[腑(ふ)に落ちる]とは? - トクする日本語 - NHK アナウンスルーム」

www.nhk.or.jp/kininaru-blog/130237.html

また、Goo辞書 (dictionary.goo.ne.jp > 辞書 > 国語辞書) にも、「腑に落ちる」は、「納得がいく。合点がいく。」と定義されており、その表現を用いた例文が引用されている。

「大西質店へ行けと言った意味などが一・ちた」(織田作之助・わが町)
6 岸本(2010)によれば、語彙的述語「ない」は主要部移動が生じず、機能述語「ない」は主要部移動が生じ時制辞と併合する。すると、形容詞「ない」は語彙述語なので主要部移動せず、その「ない」を含む文の主語は、その否定の作用域外となる。よって、NPIはその主語位置には生起できないと間違った予測がなされる。次の例文を見られたい。

(i) a. 誰一人にも [才能がない]。

(i) の正文性を説明するには、形容詞「ない」も主要部移動すると仮定する必要があるので、岸本の語彙要素と機能要素の非対称性についてはもう少し追究しなければならない。

関連して、形容詞「ない」の形容詞性にも疑問が生じるので、今後の課題としたい。

(ii) *私は [あの人 {に/を} 才能がなく] 思った。 (テスト③)

参考文献

Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*,

University of Chicago Press, Chicago.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Hopper, Paul and Elizabeth Traugott (1993), *Grammaticalization*, MIT Press, Cambridge, MA.

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房、東京.

Kishimoto, Hideki (2008) "On the Variability of Negative Scope in Japanese," *Journal of Linguistics* 44, 379-435.

岸本秀樹 (2010) 「否定辞移動と否定の作用域」『否定と言語理論』加藤・吉村・今仁 (編)、27-50、開拓社、東京.

Kuno, Susumu (1973) *The Structure of Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, MA.

益岡隆志・田窪行則 (1996) 『基礎日本語文法』くろしお出版、東京.

三原健一 (2001) 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社、東京.

www.nhk.or.jp/kininaru-blog/130237.html

Goo 辞書 (dictionary.goo.ne.jp)